

平成 29 年 2 月 7 日 (火) 林陽寺駐車場を 7 時 15 分に出発、寒かったが晴れて、太陽が眩しく輝いていた。岐阜駅にて名古屋のメンバーと合流し、定員一杯の 27 名+1 名の陽林会始まって以来のメンバーにて。途中、滋賀県に入ると天候は一変し、厳しい冬、降雪の中を一路京都東本願寺へ。何事もなく、11 時頃に予定通り到着、山門前にて案内役の小田師の出迎えを受ける。

陽林会は、各地の神社仏閣を巡る旅を続け、今回で 10 回目となり、4 月には 3 回目の坂東 33 ヶ所の巡拝を控えている。

今回は、親鸞聖人 750 回忌を終え、瓦屋根修復等の大事業後の本山参拝、研修であった。研修内容は、東本願寺(担当の方の説明有)参拝、しんらん交流館にて昼食、徒歩にて「涉成園」見学(東本願寺別邸)、バスにて「大谷祖廟」参拝後八坂神社前に集合して帰岐。岐阜駅 6 時 30 分、林陽寺 7 時 30 分頃であった。

東本願寺 は、京都府京都市下京区烏丸七条にある真宗大谷派の本山の通称である。正式名称は、「**真宗本廟**」である。堀川七条に位置する「西本願寺」(正式名称「本願寺」)の東に位置するため、「**東本願寺**」と通称される。また、真宗大谷派(以降、大谷派)としても、「東本願寺」の通称を公式ホームページ・出版物などに用い、正式名称「真宗本廟」と併用している。他に、「**お東**」、「**お東さん**」とも通称される。

我々は、まず山門の前にて東本願寺の概略の案内を受ける。この山門を「**御影堂門**」といい。京都三大門(洛西の仁和寺二王門、洛東の南禅寺三門、洛東の知恩院三門を指す。また、仁和寺二王門の代わりに洛中の東本願寺御影堂門を数える場合がある。)の一つで、楼上の正面には浄土真宗の聞法の根本道場であることを表す「真宗本廟」の額。楼上の堂内には、お釈迦さまが阿難・弥勒に真宗の根本経典である『**仏説無量寿経**』(大無量寿経)を説かれたことあらかず姿、中央に釈迦如来、左に阿難尊者、右に弥勒菩薩の三尊像が安置されている。



続いて「**阿弥陀堂**」にお詣り、御本尊・阿弥陀如来を中心に、その左右には親鸞聖人が「和国(日本の国)の教主」として仰がれた聖徳太子をはじめ、今を生きる私たちに阿弥陀如来の願いを「南無阿弥陀仏」という真実

の言葉によってあきらかにし、親鸞聖人に本願の教えを伝えてくださった、七高僧といわれる龍樹・天親(インド)、曇鸞・道綽・善導(中国)、源信(日本)、そして法然上人の 7 人の御影が掛けられている。廊下伝いに「**御影堂**」へ。世界最大級の木造建築で、宗祖・親鸞聖人の御真影を安置しているところから、御影堂と呼ばれる。



御真影を中心にその左右には、同朋の代表として、真宗本廟の給仕、仏祖の崇敬にあたられた歴代門首の御影(おすがた)をはじめ、ご本尊・阿弥陀如来のはたらきを漢字であらわした「帰命

「尽十方無碍光如来」の十字名号と、「南無不可思議光如来」の九字名号が掛けられている。金地に蓮水の壁画は、幸野楳嶺画伯（このぼいれい、1844～1895、江戸時代末から明治初期の日本画家。明治10年（1877年）師・文麟歿し塩川派を受けつぐと共に、東本願寺へも出入りし、法主・大谷光勝の巡錫に従い九州地方を写生旅行する。明治18年（1885年）再び法主大谷光勝の巡錫に随行して、東京を経て北越地方を写生旅行する。）の筆によるものとの説明を受ける。他に非公開の「大寝殿



（東本願寺正殿として重要な法要儀式的場。）を案内していただき、竹内栖鳳（たけうち せいほう）画伯の襖絵、「竹、雀、白鷺」等を見せていただく。画伯は、戦前の日本画家。近代日本画の先駆者で、画歴は半世紀に及び、戦前の京都画壇を代表する大家である。第1回文化勲章受章者でもある。動物を描けば、その匂いまで描くといわれた達人であった。

昼食の後歩いて、**渉成園**（しょうせいえん）を見学。東本願寺の飛地境内地。東本願寺の東方約150メートルに位置し、ほぼ200メートル四方の正方形をなす。面積3.4ヘクタール。歴代門主の隠居所。名称は、中国六朝時代の詩人陶淵明の「園日涉而成趣」の詞にちなむ。また、周囲に枳殻（カラタチ）が植えてあったことから、「**枳殻邸**」（きこくてい）とも通称される。昭和11年（1936年）12月、国の名勝に指定される。中国の「西湖十景」にならうかのように「渉成園十三景」が命名され、その風雅さは渉成園を訪れる人が賞賛しており、ことに頼山陽（らいさんよう）が文政10年（1827年）に書いた『渉成園記』は庭の美しさを余すところなく記したものと有名です。代表する建物の一つ「**傍花閣**」（ぼうかかく、写真）はその名の通りサクラを眺めるために建てられた、山門の形をした珍しい建物です。周囲には、緋寒桜が咲く3月中旬からボタン桜が終わる5月中旬までの約2カ月間、種々のサクラが代わる代わる咲き続けるそうです。



続いてバスにて、**大谷祖廟**（おおたにそびょう）へ。京都府京都市東山区にある真宗大谷派（本山：東本願寺）の宗祖である親鸞の墳墓の地である。墳墓は「御廟」と呼称される。通称は、「**東大谷**」。江戸時代は「**大谷御坊**」と呼称された。



境内の「本堂」と「御廟」、ならびに大谷祖廟に隣接する「東大谷墓地」は、大切な亡き人の納骨を機縁として、多くの方々が参拝される。今、生かされている私たち一人ひとりに対し、「仏法聴聞の生活」を送ることの大切さが願われています。まさに、親鸞聖人御誕生八百年・立教開宗七百五十年慶讃法要のスローガン「生まれた意義と生きる喜びを見つけよう」、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌のテーマ「今、いのちがあなたを生きている」、それぞれの呼びかけを憶念できる場所が「大谷祖廟」である。

雪がチラつく寒い日、「御影堂」の千畳敷の畳に座り、親鸞様の偉大さに触れた一日であった。